

労働価値論による「搾取」の説明

中尾訓生

一、「搾取」カテゴリーについて

マルクス経済学を特徴づけているのは一般に「搾取」論であると理解されている。

マルクスは労働価値論によって「搾取」をどのように説明しているのだろうか。

検討は「搾取」が論理的にどのように説明されているのかということであるが、私たちは検討の出発点で問題にぶつかる。

というのは『資本論』の多くの読者の念頭にある論理とは自然科学、特に物理学の影響を強く受けているものであろうが、これはマルスの実践的論理とは性格を異にしているのである。

検討は当然、マルクスの論理では「搾取」はどのように説明されているか、そしてどのように理解されるべきかをみていく。

マルクスの「搾取」の説明は、労働力商品の特性に立脚している。マルクス自身は、自己の「搾取」の説明に問題があるとは感じていないようである。むしろ「搾取」カテゴリーによって階級の維持・再生構造を明らかにしたという点に他の理論に比しての自己の論理の優越性を置いている。

商品は価値と使用価値の二面を有している。労働力商品の二面は次のよ

うに規定されている。

労働力商品の価値は労働力を再生産するために必要とされた消費財の価値、つまりこの消費財を生産するために間接・直接に投入された労働時間である。労働力商品の使用価値は労働力の価値以上の価値を創出すると規定されている。すなわち労働は労働力の価値以上に価値を創り出すというのである。私たちは搾取論を理解するためには労働の二面性と労働力商品の二面性の違いを把握しなければならない。

もちろん後で問題にするが、私は労働力商品の特性は剰余価値の説明にはなっているが、「搾取」の説明になっていないとは解していない。

「搾取」論は次のような一般的観念を打破する論理を示すものでなければならない。——資本主義社会では、労働力の売買は他の商品の売買となんら異なるところはない。労働力の価値と賃金との交換は、等価交換である。購買者は、その商品の使用価値を享受するために、つまり消費するために、それを買ったのである。労働力の購買者が、それを消費するのは利潤を得るためである。したがって労働力の購買者の利潤取得は「搾取」であると、すなわち不払い労働の領有の結果であると、労働力の販売者が、抗議するのは理屈に合わない。——

さて、このような一般的観念の下で、利潤の実体は不払い労働であると、すなわちアナタガタ（労働者）は搾取されていると説得されても、つまりアナタガタは不公正な扱いを受けていると説得されてもそれが自由な交換の結果であるから、だまされて搾り取られているとの認識にはなかなか到らないであろう。

たしかに、生活過程、職場での実践において、労働者は搾取されていると感じるかもしれないが、感覚は一時的、偶然であるかもしれない、「搾取」認識にストレートに達するというわけにはいかない。私は搾取されているという感覚が「搾取」認識のために不要であると言っているのではない。むしろ逆であって、感覚と認識とは実践によって一体化しているのである。実践と認識は不可分であるというマルクスの論理は次節で論じる。

私は労働者の日常生活感覚とは無関係な「論理」では「搾取」は説明することはできないと考えている。通常、経済学では、このようなとき、論理という語は使わないであろうであろうが。

労働力商品の特性から引き出された「搾取」カテゴリーは労働者が搾取されていることを認識しているかどうかに関わりのない客観的にして社会的事実であるというのが、マルクス経済学の通説である。私たちの主張は前述の一般的観念の下においてなおかつ労働者は搾取されているという認識を抱かざるを得ないのは何故であるか、ということである。

『資本論』では「搾取」はどのように論証されているのであろうか。

マルクスは利潤が存在するためには、消費財の労働生産性 ($1/t$) は、実質賃金率 (R) よりも大でなければならない (置塩によるマルクスの基本定理) ということを明らかにした。

$R = B/T$ とすると t は消費財一単位の価値である、 T を1日の労働時間、 B を1日に労働者が消費する消費財の量、剰余価値は $T - t \cdot B$ であるから剰余価値が正であるためには $\frac{1}{t} > R$ でなければならない。いうまでもなく、剰余価値の領有が利潤の取得である。

しかし、これが資本家による労働者の「搾取」であるというためには、一般的観念に反して剰余価値は労働者に帰属すべきものということが前提になっていなければならない。私はこの前提が実践の内に含まれていると解釈している。剰余価値の領有が不払い労働の領有であるとき、「搾取」ということになる。¹⁾それは価値実践者として労働者は搾取され、使用価値実践者として彼らは「搾取」の認識に到る。

というのは、この前提を支える実践が一般的観念に反して、剰余価値は不当に領有されているということを引き出すのである。もちろん、この実践は絶えず再生され、ある人だけが有しているというのではなく、労働力商品の販売者の過半が有しているということである。

私は人々が常識としている観念を突き破って搾取の認識に到るであろうということ、したがって新たなる観念の構築に到るであろうということ

を「搾取」カテゴリーは説明するものでなければならぬと考えている。

マルクス経済学者は『資本論』が前提している剰余価値率≡搾取率を何らの疑念も抱くことなく受容しているのであるが、私たちはこれをまず検討する。

剰余価値率≡搾取率を受容してしまえば、一般的観念は虚偽であると、つまり流通過程における等価交換は生産過程における「搾取（不払い労働の領有）」を隠蔽するものであるという主張は容易である。自己労働に基づく所有に立脚した私有財産の正当性、不可侵性を強調するブルジョア・イデオロギーの批判は簡単である。これは「22章、剰余価値の資本への転化」の「1節」での「商品生産の所有法則の資本主義的領有法則への転換」で展開されている。

しかし、一般的観念の下では、人々はこれを受容していないのであるから、すなわち彼らは労働の苦痛を賃金から得られる効用とを比較衡量することで労働力の販売行為を決定しているという観念を受容しているのであるから、むしろマルクスの主張こそ自己の『価値観』を一方向的に押しつけるイデオロギーではないのかということになる。そこで剰余価値率≡搾取率を検討しなければならない。

マルクスによると労働力商品の販売者が販売行為を個々の偶然的なもののみならず、この一般的観念を突き破ることはできない。彼らは恒常的に労働力を販売せざるを得ないということから階級としての

1) 御前進『価格現象と労働価値』159頁、ミネルヴァ書房、「搾取」カテゴリーは、二つの違った認識論的次元を含んでいる。御前によると次のようになる。搾取カテゴリーには労働がそしてそのみが、生産物の創造主だということが含まれている。そうであるからこそ、労働者は単に取得権を奪われているにとどまらず、商品生産社会の取得原則にもとづくなれば本来、労働者階級だけがすべての生産物に対して取得権をもつべきだということになり、「搾取」カテゴリーの根拠が与えられる。氏は労働価値論を以上のような規範的内容を含んでいると解釈する。ここから、氏の場合、労働価値論に立脚して価格論を論理整合的に展開するという課題がマルクス労働価値論の次なる課題ということになる。

自己を自覚することで一般的観念を突き破ることができる。

彼らは生産手段から排除されており、生活するためには労働力を売る以外にはどうしようもないということを共に認識し、階級としての自覚をもつとき、労働力の購買者に搾取されているという認識に到るというのである。

マルクスの搾取論は生産手段の所有者と非所有者を想定していることになる。この想定をマルクスは歴史的事実（本源的蓄積過程）として与えている。

そこで搾取論の前提になっている歴史的事実、つまり所有形態は経済の発展とともに変化していくのであるから、搾取の規定はどうなるのであろうかという問題が生じる。いうまでもなく、マルクス以後の問題である。例えば、それは所有と経営の一致がくずれ、所有と経営の分離が一般的になったようなときでも、搾取の規定は有効なのであろうかというような問題である。

剰余価値率≡搾取率を受容すると、次の展開は価値論（本質）次元から価格論（現象）次元を導出することになるのであるが、私は剰余価値率≡搾取率としていることを検討している。

マルクスは「労働力の価値」と「賃金」は、あるいは「剰余価値」と「利潤」の関係は「本質」と「現象」の関係であると述べている。「労働力の価値および価格または労賃という現象形態は、現象となって現れる本質的關係としての労働力の価値および価格とは区別されるのであって、このような現象形態については、すべての現象形態とその背後に隠されたものについて言えるのと同じことが言える。前者は普通の思考形態として直接にひとりで再生産されるが、後者は科学によってはじめて発見されなければならない。」²⁾

自己の階級性を自覚している彼、彼女は搾取を認識しているから、「本質」

2) 『資本論』 I, 678頁, 向坂・訳, 岩波書店

と「現象」というマルクスの主張を理解することができるであろうが、私たちは彼、彼女はいかにして階級的自覚に達したのかを説明しなければならない。

私は「本質」と「現象」をセットで考察しなければならないと考えている。すなわちセットで考察するということは「現象」と「本質」を拮抗させている主体を考察するということになる。

マルクスに従って「現象」と「本質」という用語を使用したか、これはマルクスのどの文脈を検討しているかを知ってもらうためである。

現実世界（日常世界）では資本家は利潤率を、労働者は賃金率を行動基準にしている。いうまでもなく、この行動基準は市場における自由・平等の観念によって支えられている。私たちは資本家、労働者の日常的行動の内こそ、本質論的次元を見いださなければならないと考えている。

このためには労働力商品化の成立をみておかなければならない。これは『資本論』の「貨幣の資本への転化」で説明されている。³⁾

労働力の商品化は本源的蓄積過程と自由・平等の観念の母胎である価値関係とによって確立された。したがって搾取の構造は所有形態と価値関係の両面から考察しなければならないということになる。マルクスは搾取論にとって価値関係カテゴリーが重要であるとは考えていないようであるが。

二、労働価値論の解釈に欠落していること。

本稿は、労働価値論を『資本論』の体系に位置づけて解釈する。

これによって「搾取」カテゴリーを明確にしていきたい。

私は、マルクス労働価値論の核心は「1章、2節、商品に表示された労働の二面性」から「労働過程と価値増殖過程」への展開に貫いているもの

3) 拙稿、「貨幣の資本への転化」所収『山口経済学雑誌』23巻5・6号

と解釈している。

私は「2節」の要点は「一般的抽象的労働」「具体的有用労働」という労働の二面性の説明にあるとは考えていない。要点は「……表示された」というところにあると考えている。

「資本の一般定式の矛盾」から労働力商品の特性に立脚し、そこから不払い労働の領有を「搾取」とする説明、すなわち等価交換の背後で「搾取」が行われているという説明が、明らかにしなければならないことは、「搾取」が説明されているような社会的事実であるならば、人々にその事実を、つまり「搾取」を認識させる根拠である。

私は「搾取」を不払い労働の領有というように狭く解釈していない。資本制経済は人々を非人間的に扱うことによるのみ存立し得るということが「搾取」の意味内容であると解釈する。「搾取」は搾取されている主体を欠落させて説明することはできない。そしてこの「搾取」の認識に人々は不可避的に到らざるを得ないということを説明することが労働価値論の課題であると考えている。換言すると社会は存続するためには不可避的に人々に「搾取」を認識させざるを得ない。この意味は資本主義社会は疎外の状況を強めることでのみ存立し得るのであるが、このことが人々にこの社会を否定して新しい社会を展望させるようになるであろうということである。

まず、マルクスが労働価値論を採用した論拠を述べておこう。

それは「1章, 1節, 商品の二要素」で展開されているようなヴェームが言うところの蒸留法によるものではないと考えている。⁴⁾

読者への「わかりやすさ」というサービスのために採用された蒸留法による「価値」を抽出する仕方によって、マルクスは自ら苦闘して獲得したエッセンスを読者に見失わせてしまっている。

4) 「カール・マルクスとその体系の終結」『論争・マルクス—経済学』スウィーギー編, 玉野井・石垣, 訳, 法政大学出版局

マルクスが、労働価値論を論理的に確定したのは先行する諸論述を「抽象的労働（同等な社会的労働）」「具体的有用労働（合目的な生産活動）」によって整理分類したことによる。先行する諸論述とは資本主義社会において人々が追い求める「富」、すなわち人々が一番の関心をもっている「富」について人々が論じ、語っているところのものである。

人々が社会的に一番の関心事について論じ、語っている中味の内に、彼らは意識していないが、彼らの実践（労働）の向かっている方向をマルクスは読み取ったのである。マルクス労働価値論を解釈するとき、諸論述のうちマルクスが二様の労働を読み取ったということが重要な点である。というのはこれがひるがえって労働価値論の構成要素となっているから。

この社会には抽象的労働と具体的有用労働が、存在している。マルクスは抽象的労働と具体的有用労働が、この社会においてどのような位置を占めているかを諸論述の検討を通じて明らかにしていく。⁵⁾

私たちが注目しておきたいことは、「対象に働きかけている実践(労働)」と「その対象について語っている内容」とを関係づけている点である。このとき、実践者は、自己の実践の性質を意識しているわけではない。多くのマルクス解釈者はこの関係を見逃しているのであるが、この関係づけはマルクスの論理を特徴づけており、社会科学上の認識論においても画期的であり、転換点をなすものである。マルクスはこれが「イギリスの経済学とフランスの経済学とのあいだの国民的な対照の発生的説明」をさえ可能にするだろうと言っている。

本稿では労働価値論はこのような視角に位置づけられている。

私たちは「商品に表示された労働の二面性」を以上のように解釈している。「・・・表示された」というのは商品について人々が、語っている内容を労働の二面性から分類することができたということを受けている。

ここで述べている抽象的労働とは対象を量に還元してしまう。私はこれを価値実践と呼んでいる。価値実践者間の関係が価値関係であり、彼らはこの関係を自由・平等の関係と言表するのである。

三、マルクスの方法によってマルクスの労働価値論を検討

マルクスは『経済学批判』の「商品の分析に関する学説史」で先行する諸論述を「価値実践（抽象的労働）」と「使用価値実践（具体的有用労働）」でもって整理分類した。これについては既に論じているのでここでは簡単に述べておく。⁵⁾

私は「労働」を「実践」という用語で置き換えている。私は「労働」カテゴリーにマルクス経済学で理解されているより広い意味をもたせており、また「労働の二面性」が主体において拮抗している点を強調するためにあえてマルクスの用語を避けた。すなわち商品を生産するための「労働」というだけでなく、それよりも広い意味を、すなわち生活活動をも含めて「実践」という用語を使用している。人は「富（商品）」についてそれぞれに論じるのであるが、諸論述は価値実践と使用価値実践の視点から分類できる。これが「・・・表示された」ということなのである。すなわち、労働の二面性が商品に「表示されて」いるから、商品についての諸論述がこの視点から分類できるのである。

もちろん、彼らは実践と解釈の密接な関連については意識していない。解釈の対象は「富」であるが（マルクスは富を商品と規定したのである）、いかなるモノを「富」とするかは人々の実践によって規定されている。彼らは選択した解釈対象が自己の実践性格と関係しているということにつ

5) 『マルクス・エンゲルス全集』13, 36頁「商品を二重の形態の労働に分析すること、使用価値を現実的労働または合目的な生産活動に、交換価値を労働時間または同等な社会的労働に分析することは、イギリスではウィリアム・ペテイに、フランスではボアギュベールに始まり、イギリスではリカードに、フランスではシスモンディに終わる古典派経済学の一世紀半以上にわたる諸研究の批判的最終成果である。」ここで述べている内容は、『資本論』の「1章, 2節, 商品に表示された労働の二面性」の次の叙述につながっている。「商品に含まれている労働の二面的性質は私がはじめて批判的に証明したのである。この点が跳躍点であって、これをめぐって経済学を理解がある。」

ては無知である。同じモノが実践性格の違いによって違って表現される。だから解釈対象とはカテゴリーのことであり、主語であることに注目しておかなければならない。

解釈する（論じる）とき、彼らは価値範式か、使用価値範式のどちらかに依拠している。解釈のさいに彼らが使用するカテゴリーは述語となり、これらは価値範式か、使用価値範式のどちらかに分類されている。

マルクスの方法に従うと先行する諸論述は、以下のように四つに分類される。マルクスが取り上げているのは（一）と（三）に分類されている諸論述である。

価値範式 | 使用価値範式 (図-1)

価値実践	一	二
使用価値実践	三	四

（一）に分類される諸論述はリカードに至る流れであり、また新古典派の論述でもある。マルクスはペテイからリカードに至る流れをカテゴリーの素材からの分離の過程と特徴づけている。

特徴はモノの具体的属性が捨象されていく過程であり、量的分析の徹底化の過程である。その論述構造は主語も述語も価値範式で分類されるカテゴリーで構成されている点である。これは価格論次元の分析を徹底させる。したがって、ここでの論述は、結局のところ価格論の背後に想定している価値論を不要とする。この場合、価値論は需給によって変動する市場価格の均衡を説明する役割だけを与えられる。

価値論に課せられていた他の側面、つまり「富とは何ぞや」「生産的労働

6) 拙著「4章、経済解釈と経済カテゴリーの形成」『資本主義社会の再生産と人権観念』

とはいかなる労働か」というような問いは、捨象されていく。この問いは理論がいかなる性格の人間を想定しているかというところから発せられる。リカードの想定した人間は、1時間労働する人間と2時間労働する人間というように時間に還元される。甲は1時間労働し、乙は2時間労働するというのではない。リカードの想定した人間は、リカード自身は気づいていないのであるが、当時の人々にとっては異質の人間であった。しかし資本制経済の深まりは、このような人間を普通の人間としてしまった。後述するが、これはリカード理論が要請している『価値観』と当時の人々の『価値観』の違いを示しているし、また資本制経済の深化は前者の『価値観』を通常のものとしてきたということである。

新古典派においても想定されている合理的経済人の性格は人間本来の性格として検討対象から外されている。これの検討は純粋経済学の外側のことであるとされている。すなわちこれは純粋経済学の対象ではないということである。合理的経済人の『価値観』は市場社会の『価値観』である。

(一) に分類されている論述はそこに想定されている人間の『価値観』と『社会の価値観』の一致を特徴としている。

マルクスの労働価値論とリカードの労働価値論は質的に相違している。マルクスは自己の労働価値論の核心を把握した後、次のように述べている。

「リカードは古典派経済学の完成者として、労働時間による交換価値の規定を、もっとも純粋に定式化しかつ展開したのであるから、経済学者の側からおこされる論争はおのずから彼のうえに集中する。」⁷⁾

それらはアグリゲーターの問題であり、利潤源泉の問題、変動する価格を背後で規定しているのはそれに投入された労働量であるということ、労

7) 「経済学批判」46頁、『マルクス・エンゲルス全集』13, 大月書店

8) 置塩氏はリカードが解決することができなかった問題は「(1), 一定分量の生きた労働の価値たる労賃はこの同じ分量の生きた労働によって生みだされる生産物の価値よりも小さい。では価値法則と剰余価値の存在とは矛盾するのか。(2), 価値法則と平均利潤率の形成は矛盾するのか」と要約している。『マルクス経済学』28頁, 筑摩書房

働が投入されていない商品の価格の説明，である。⁸⁾

もちろん，これらの問題は総生産物の三階級への分配というリカードの課題から出てきている。

これらの問題はマルクスが把握した価値論の核心を必要としないで解答を与えることができる。したがって，それは，もしマルクスの労働価値論の課題がこれらの問題に解答を与えることだけであるとするなら，マルクス労働価値論は崩壊することになるであろう。

置塩も柴田，森嶋もマルクスの「価値」規定についての理解は共通である。それは「ある商品一単位当たりの価値は，その社会における標準的な生産条件と労働の熟練，強度をもって，その商品一単位を生産するために直接，間接に必要な労働量できまる。」というものである。⁹⁾

柴田や森嶋が解釈している労働価値論の特徴は，労働価値論をリカードの延長上に位置づけることになっている。そしてこれが，分析用具としての労働価値論を不要とし，価値と価格とのつながりを切断することになっていく。

マルクスが整理しているところのリカードの直面した問題を解決しようとしたら，ドミトリエフやスラッフアのようにリカードが利用した労働価値論は必要でなくなる。

柴田の解釈は，均衡価格（生産価格）を説明するのに労働価値論は不必要というものである。柴田は次のように述べている。「労働価値説を徹底させると価値論抜きの価格理論と同一の結論に到達する，すなわち，例えば所与の生産係数・所与の実質労賃の下において理論的に到達される価格や一般的利潤率の高さは労働価値説によるか否かによって異ったものとなるようなことはない。」¹⁰⁾

森嶋は，上述の価値は「雇用乗数」として規定できるとしている。「価値

9) 置塩信雄『資本制経済の基礎理論』9頁，創文社

10) 柴田 敬，「労働価値説の徹底的考察」『山口経済学雑誌』4巻，7・8号

とは、カーンが、さらにのちになってケインズが論じ、そしてレオンチェフの投入—産出表から計算することができるようになった雇用乗数にほかならぬことは明白」と言う。彼は価値方程式体系から得られる価値と投入—産出体系から得られる価値が等しいことを数学的に論証することでマルクスの「価値」を近代経済学のなかに取り込む。¹¹⁾

価値を雇用乗数であるとするなら、置塩が強調する利滴の源泉は労働にありとする点は消失する。いずれにしても柴田、森鳴においては、リカードの課題を果たすうえでマルクスの労働価値論を必要としない。

もし、労働価値論を柴田や森鳴のように解釈するなら、このような労働価値論についての論述は(一)に位置づけられるであろう。¹²⁾

置塩の労働価値論解釈は次節で述べる。

(三)に分類される諸論述は、シスモンデイ、ブルードンに代表されるような諸論述である。ここでの諸論述は社会の現状を批判するものになっている。¹³⁾

彼らは使用価値実践者である。使用価値実践に影響されて彼らの解釈対象(主語)は、使用価値範式によって分類されているカテゴリーである。解釈(述語の確定)は、価値範式によって行われる。資本主義経済を支えているのは価値実践者であって、彼らは現状を肯定するのに対して使用価値実践者は価値実践を批判する。

(一)と(三)の諸論述を比較してみると相違の一つはその論述に内包されている『価値観』の相違として現れている。

11) 森鳴通夫『マルクスの経済学』22頁、東洋経済新報社

12) 森鳴通夫、前掲書、13頁、森鳴は労働価値論の役割について「現実の価格がいつもそのまわりを変動するような諸商品の均衡価格を説明すること、多数の産業を少数の部門に集計するとき用いられるアグリゲーター(集計因子)、あるいは集計のウェイト(荷重因子)をえること、の二つである。」と述べている。

13) 「リカードの存命中に、そして彼に対立して、ブルジョア経済学にたいしてはシスモンデイという人物の姿をとって批判が立ち向かったのである。」「資本論』第二版後記

それは価値実践者の『価値観』と使用価値実践者の『価値観』との相違である。価値実践者の『価値観』，すなわち (一) の諸論述に内包されている『価値観』は、『社会の価値』と一致しており，使用価値実践者の『価値観』，すなわち (三) の諸論述に内包されている『価値観』は、『社会の価値』と異なっている。

(三) の諸論述が読者にイデオロギー的であるとの印象を与えるのは，つまり読者がこの論述に非科学的という性格を付与するのは，読者自身が無意識的に受容している『社会の価値』によって諸論述に含まれている『価値』を意識せざるをえないからである。(一) の諸論述が，精緻化されればされるほど，これらの諸論述は『価値観』から解放されているような，つまりヴェーバーのいう「価値自由」であるような印象を与える。実際，(一) の諸論述は，精緻化の条件を備えている。それは，解釈対象と解釈のための範式の一致である。しかし，既述のように (一) の諸論述は，(三) と同じように決して『価値』から解放されているわけではないのであって，(三) の諸論述がイデオロギー的であるなら，(一) の諸論述も同様である。

それではマルクスの労働価値論をマルクスの方法で検討するとどうなるであろうか。いうまでもなく「表」に見られるような分類を可能にしたものが，マルクスの労働価値論である。

それは，実践（労働）と実践対象についての解釈との不可分離性に注目することで可能になっている。この表に分類される諸論述は，この点についての認識を欠落させているのであるから，マルクスの論述が表のどこかに位置するものとするわけにはいかない。剰余価値 ($T-t \cdot B$) が「不払い労働」と認識されるのは価値実践と使用価値実践の対抗関係においてである。私たちはブルジョア経済学の諸カテゴリーの批判体系がマルクスの論述であると解釈している。¹⁴⁾

14) 拙著，前掲書「4章，経済解釈と経済カテゴリーの形成」

四、経済学批判と資本主義経済

実践の性格についての言及は簡単にしておく。

実践は次のような性格をもっている。

抽象的労働（私はこれを価値実践と表現している。）は、働きかける対象を価値化する、したがって量化する労働のことである。この場合、労働主体自身が、価値実践者になっている。

具体的有用労働（私は、これを使用価値実践と表現している。）は、対象の具体的属性を尊重した労働であり、対象の諸条件とともに労働内容を豊富化していく。マルクスが「労働は創造する生きた火である」というとき、この労働は私たちの文脈では使用価値実践のことである。使用価値実践者は労働において自己の存在根拠を感得しようとして労働の意義を絶えず問いつめる。資本主義社会を支えている価値実践は、労働の細分化、つまり技術体系の相互関連性の広がり、社会、自然への影響を拡大していくのであるが、価値実践者は他者に対して無関心であり、孤立的であるので当然のことながら社会的にその存在意義を問いつめられていく。これは使用価値実践の視角からなされる。

本節の課題に視点を変えて取り組んでみよう。

さて、価値実践者も使用価値実践者もともに価値実践の世界の下に存る。上衣： x 着＝リンネル： y エレの等式が、成立するためには、上衣＝ X ＝リンネルの成立を前提にする。

X は、抽象的労働（価値実践）の世界、量の世界である。この世界の下ではじめて規則性をもった、人々を律する交換比率 {上衣： x 着＝リンネル： y エレ}が成り立つのである。見知らぬ人々の間にコミュニケーションが成立しているから、交襖は成立する。このコミュニケーションを成立させているものが、 X である。価値実践の世界を論理的に設定する課題になっているのが、「価値形態論」であった。

価値実践の世界を設定しているのが、労働価値論（1）である。次に X が設定されて、上着とリンネルの交換比率を確定するという問題が、扱われることになる。交換比率の確定、つまり価格分析のための労働価値論（2）が存在している。

労働価値論の検討は、（1）と（2）の論理的関連を明らかにすることに集中する。いうまでもなく、（2）の労働価値論は（1）と切断されるとシュムペーターのいうところの分析用具ということになる。

柴田や森嶋は、（2）だけを扱っている。その結果、分析用具としての労働価値論も彼らの展開ではよりよい分析用具に代置され、放棄されることになる。

置塩は、価格分析は労働価値論によってなされなければならないことを強調する。

彼の積極的論点は、労働価値論によって資本制経済のメカニズムだけでなく、その特質、つまり「搾取」を明確にすることができるということである。しかし私には彼が労働価値論によってその特質を明らかにしているようには思えない。

資本制経済の第一の特質は資本家による労働者の「搾取」にあるというのはマルクス経済学者に共通している。

置塩はマルクスの基本定理として示される労働価値論から剰余価値の存在を論証している。そして資本家の剰余価値（利潤）の取得は「搾取」であるとしているのであるが、彼はこれを労働価値論から導いているのではない。¹⁵⁾

「搾取」は階級（生産手段の所有者、非所有者の存在）の存在から導かれている。¹⁶⁾

置塩は生産手段の私的所有を労働価値論によって説明しているわけではないのであるから、「価値の価格への転化」の説明を搾取論を労働価値論によって完成するためと根拠づけることはできないであろう。

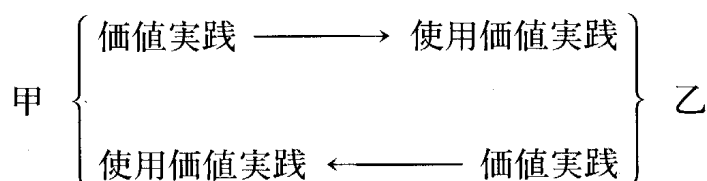
剰余価値率は $T - B_t / B_t$ である。剰余価値率を高めるためには労働時

間 (T) の延長か、労働力の価値 (Bt) の切り下げである。たしかに、剰余価値率を高めようとするこのような資本家の行動は現実の彼らの行動に合致している。しかし剰余価値を資本家が領有することに労働者が同意しているならば(市場で成立している一般的観念はこれに同意を与えている。), 「搾取」を論証しているとはいえないのである。労働力の価値は切り下げられても B (生活手段量) が増大するならば、労働者は満足するであろう。つまり「搾取」カテゴリーは労働者が搾取されることに何故、「同意する」のかも説明しなければならないし、「満足」しているにもかかわらず、それが「搾取」であることを説明しなければならない。

X を設定する労働価値論と交換比率を明らかにする労働価値論についての私の考えを述べることにしよう。

X の設定にさいして価値実践と使用価値実践は以下の図でしめされているような関連にある。

商品交換者：甲と乙の関係を成立させる基盤が X である。



- 15) 三土修平「搾取論の回顧と展望」207頁, 所収『市場と計画』経済理論学会年報29集, 「マルクス—置塩の定理の成立する状態が, 一部の人間による不労所得の独占という意味での「搾取」に結びつくかどうかは, 背後にある所有権の分布状態のいかんによるのである。」
- 16) 置塩信雄『マルクス経済学』筑摩書房, 18頁「資本制社会は, 階級社会である点で, 原始共産社会, 社会主義社会と区別される, 階級社会は生産手段が直接生産者でない少数の人々によって所有されていることによって特色づけられる。そこにおいては, 生産手段私有者が生産についての質的・量的決定をおこない, 生産物を所有し, 生産過程で消費した生産手段を補填し, 直接生産者の労働力の再生産に必要な生活資料を与えたのちに残る剰余生産物を搾取する。このことは奴隷社会における奴隷所有者, 封建社会における領主, 資本制社会における資本家いずれについても共通である。」

(1), 商品交換は自己の価値実践によって相手の使用価値実践を同化することによって構造化されている。同化によって X は持続し、固められていく。同化は貨幣を介して行われている。X を表現している具体的なモノが貨幣である。X 設定の論理は「価値形態論」であるが、これの解釈は省略する。¹⁷⁾

ここでは価値実践と使用価値実践が取り上げられている。そして甲、乙の主体においてこれらの実践は拮抗しているものと想定されている。

(2), 10時間の労働が体化されている上衣1着と5時間の労働が体化しているリンネル1エレの間に成立する交換比率は上衣1着＝リンネル2エレであろう。体化している労働は抽象的労働（価値実践）のことであって使用価値実践は交換比率の決定においては取り上げられてはいない。

マルクスの労働価値論は(1)と(2)を切り離すことはできない。Xによって経済過程に登場する人々がこの社会では主役であり、彼らの行動は効用理論におけるように人間の本性に還元されるというようなものではなく、社会によって、したがって歴史的に規定されているということを明瞭ならしめる。

経済を支えている人間の社会的、歴史的性格の抽出は、実は彼らが使用しているブルジョア経済学の諸カテゴリーの批判を通じておこなわれている。他方、価値実践者としての彼らの行動を分析することは資本主義経済の分析に帰結する。経済学批判の体系としての『資本論』は(1)と(2)の両面を扱っている。この両面を一体化しているのが、価値実践と使用価値実践を拮抗させている主体である。

私たちは「7篇22章、剰余価値の資本への転化」でマルクスのブルジョア経済学のカテゴリー批判を読むことができる。批判は「不払い労働の領有」を前提にしておこなわれている。「資本家と労働者とのあいだの交換という関係は、流通過程に属する外観にすぎなくなり、内容そのものとは無

17) 拙著、『資本主義社会の再生産と人権観念』「6章、基本関係の設定」

関係でただ内容を不可解にするだけの単なる形式になる。労働力の不断の売買は形式である。内容は、資本家が、絶えず等価なしで取得するすべに対象化された他人の労働の一部分を、絶えずくり返しそれよりも多量の生きた他人の労働と取り替えるということである。」¹⁸⁾

というものである。ここでは、ブルジョア経済学が前提にしている自由・平等、私有財産の不可侵は明解に、わかりやすく批判されている。

私は自由・平等や私有財産の不可侵というようなものは価値実践そのものにおいて、価値実践が働きかける他者、モノとの関係のなかで批判しなければならないと考えている。

主体の外側にあるモノ（価値の体化物）を不公正に領有しているというとき、不公正あるいは公正ということは実践そのものにおいて、あるいは実践が働きかけている対象（他者、モノ）との価値関係（=X）のうちでこそ確認されるのである。

既に述べているように、私は「搾取＝不払い労働の領有」によった諸カテゴリー批判には同意しない。このような批判は（1）の重要性を軽視することになり、つまり生産手段の所有者と非所有者を外的に設定することになっているから、容易に反批判にさらされる。

搾取を規定している所有形態は価値関係に包摂されていることを忘れてはならない。

五、疎外された労働と労働価値論

マルクスの国民経済学批判は、始めは「疎外された労働」に立脚してなされていた。

改めて指摘しておくが、本稿で労働価値論といているのは「商品に表示された労働の二面性」から「労働過程と価値増殖過程」に至る『資本論』

18) 『資本論』 I, 732頁, 向坂・訳, 岩波書店

に貫徹している論理のことである。

そこで「疎外された労働」がどのような問題をかかえながら「労働価値論」へと展開していったかをみることにする。

マルクスがいかに現実の経済を把握していたかは以下に述べているところから察せられる。

「労働者は、彼がより多く富を生産すればするほど、彼の生産力が力と嵩を増せば増すほど、それだけいっそう貧しくなる。労働者はより多く商品を生産すればするほど、彼はそれだけいっそう安い一個の商品となる。事物世界の価値増大に、人間世界の価値下落が直接比例してすすむ。」¹⁹⁾

このような把握から現実を分析している国民経済学を批判していく。批判の特徴はカテゴリー批判である。マルクスは国民経済学の諸カテゴリーをまず、主体の行為（労働）に関連させる。

彼は国民経済学に次のような不満をもっていた。「国民経済学は私的所有の事実から出発するが、これをわれわれに解明しない。それは私的所有が現実のなかで経る物質的過程を、一般的な抽象的な諸方式に表現する。するとこれらは国民経済学にとって諸法則と見なされる。それはこれらの法則を理解しない。すなわち、これらがどのようにして私的所有の本質から生じるかを証明しない。国民経済学はわれわれに、労働と資本との、資本と土地との、分割の根拠にかんしてなんら解明をあたえない。」²⁰⁾

つまり国民経済学は存在している諸要素を所与とし、諸要素の機能的関連を問題にするだけである。

彼は国民経済学が使用している用語の意味をあくまで生活感覚、生活過程に密着してとらえかえすのである。かくすることでその用語の意味、つまりカテゴリーの形成をとらえることができる。かくして存在そのものの批判を可能にする。

生活感覚、生活感情は「労働」のうちにこそ現れるというのが、彼の直

19) マルクス『経済学・哲学手稿』98頁、藤野 訳、国民文庫

20) 前掲訳書、96頁

感である。私たちが自己のアイデンティティを実感するのは労働においてであるというのが彼の確信である。労働は人間の自己定義と自己概念の基礎である。したがって、「労働」は商品を生産する労働に限定されないで広い視角からとらえられている。

このような労働感覚から現下の経済状況をみると以下のように解釈できる。「すなわち、労働が生産するところの対象、労働の生産物は、労働にたいして、ある疎遠なものとして、生産者に依存しない力として立ち向かうということ。労働の生産物とは、労働が一つの対象のうちに固定され、物的ならしめられたものであり、労働の対象化である。労働の実現とは、労働の対象化である。この労働の実現が国民経済学的状態においては、労働者の現実性剥奪として現われ、対象化が対象の喪失および対象の奴隷たることとして、我がものとする獲得が疎外として、外化として現れる。労働の実現が現実性剥奪として現れるはなほだしさは、労働者が餓死するくらい現実性を剥奪されるほどである。」²¹⁾

国民経済学的事実を「疎外された労働」カテゴリーで分析している。すなわち、「疎外された労働」カテゴリーは主体の外側にあるモノの体系(原材料, 機械設備, 生産物, 財産, ……)は主体と不可分離であること, 主体の行為(疎外された労働)そのものを表現しているという対象把握を内含している。モノが資本と表現されているなら, それに働きかける労働は賃労働である。

したがって, 現実の経済状況の分析は, (主体の行為とは切断している)モノの分析をしている国民経済学の批判にもなっている。国民経済学が経済諸カテゴリーが実践と不可分離であることを認識し得ていないことを明らかにするために, マルクスはカテゴリーの形成に注目する。

マルクスは人間と動物を対比することによって人間を人間たらしめる活動をひきだし, 「疎外された労働」を浮き彫りにする。

21) 前掲訳書, 98頁

人間の本源的活動と現実の労働を対照させて「疎外された労働」を規定する。「飲食、生殖、等々はなるほどまた、もともと人間的な機能でもある。だが、それらをその他の周囲の人間の活動から切り離して、究極の、それだけが最後の目的にするような抽象のなかでは、それらは動物的である。」²²⁾

いうまでもなく、彼は「疎外された労働」をこのような意味あいにおいて動物的行為とみなしている。

彼は次のようにみている。動物には生存を図るための本能としての生活が存在するだけであるが、人間は「(生活活動を) 彼の意欲および彼の意識の対象とする。……意識的な生活活動が人間を動物的生活活動から直接に区別する。……まさしくこれによってのみ人間は一つの類的存在である。あるいは、人間が一つの意識的存在であるのは、すなわち、彼自身の生活が彼にとって対象であるのは、ただまさしく彼が一つの類的存在であるからにはほかならない。ただこのことによってのみ、彼の活動は自由な活動である。」²³⁾

私たちはすぐに自問するであろう。人間は人間本来の存在を歪められた「疎外された労働」の状況になぜ、甘んじているのであろうか。

彼は続けてこの問に答えている。「疎外された労働はこの関係を逆にし、人間はまさしく一つの意識的存在であるからこそ彼の生活活動を、彼の本質を、ただ彼の生存のための一手段にすぎなくするのだということになる。」²⁴⁾

「疎外された労働は、自己活動、自由な活動を、手段に引き下げるのだから、それは人間の類的生活を彼の肉体的生存の手段にしてしまう。」²⁵⁾

彼は、疎外の状況が人間の通常の場合であると人々に思い込ませる心的

22) 前掲訳書, 103頁

23) 前掲訳書, 106頁

24) 前掲訳書, 106頁

25) 前掲訳書, 108頁

機構の存在を指摘している。彼は疎外された労働（価値実践）を正当化するために理由づけ、解釈する。そして納得する。人間は意識的存在であるが故に疎外された状況に甘んじることを納得することもできる、すなわち消極的ホメオスタシスである。

「疎外された労働」カテゴリーによって国民経済学の諸カテゴリー（例えば「私的所有」は「疎外された労働」によって説明され、批判されている）は根底から批判されているが、「疎外された労働」の論拠を彼は与えてはいない。換言すると、ポパーの表現を借用すると「疎外された労働」カテゴリーは反証可能なものとしては与えられていない。いうならば、「疎外された労働」は彼の『価値観（人間観）』の領域にとどまっている。彼の課題は「疎外された労働」を経済学批判体系の出発点に措定することである。そうでなければ、「私的所有」という経済分析の主要カテゴリーも誤用されるだけである。

「われわれはたしかに外化された労働（外化された生活）の概念を国民経済学から、私的所有の運動 {具体的事実} からの結果として獲得した。しかしこの概念の分析にさいして明らかになることは、たとえ私的所有が外化された労働の根拠として、原因として現れるにしても、それはむしろその帰結なのであって、ちょうど神々もまた根源的には人間の知性の迷いの原因ではなくて結果であるのと同様だということである。」²⁶⁾

彼は現実に観察される「私的所有」から労働者の「疎外」状況を確定したのであるが、「疎外」から「私的所有」を認識すべきであると述べている。御前は「私的所有」から「疎外された労働」に到達する展開をマルクスが後に確定している経済学方法の「下向」に照応させている。「疎外された労働」から「私的所有」を演繹する展開を「上向」の方法に照応させている。²⁷⁾

26) 前掲訳書、114頁

27) 御前進、『価格現象と労働価値』「<私有→疎外>は諸現象形態の源泉が私的所有であることを突き止め、疎外として人間論的に規定し直す下向過程、<疎外→私有>はこの下向の終点としての最も基本的な関係から私的所有へと概念的に説明して行く上向過程だと理解するのである。」233頁

しかし、氏は『資本論』では上向の起点は「疎外された労働」でなく、「商品」であることを説明していない。問題は「疎外された労働」と人間の本性を対置し、この対置から論理を展開するマルクスの方法を理解することである。この方法が「商品に表示された労働の二面性」として確立したことは既に述べたとおりである。

不払い労働の領有（搾取）は通説では私的所有から導かれているが、搾取を主体の行為からとらえようとするすると前述しているように「疎外された労働」を上位カテゴリーと考えるのが妥当であろう。「私的所有」に関してマルクスは次のような問を発している。「労働の生産物が私に疎遠であり、疎遠な力として私に立ち向かうなら、それはいったい、だれに属するのか。」²⁸⁾

この問には当然、「疎外された労働」から答える。

「疎外された、外化された労働によって労働者は、労働に疎遠な、労働の外に立っている人間の、この労働にたいする関係を生みだす。労働者が労働にたいする関係は、資本家が労働にたいする関係を生みだす。私的所有はこうして、外化された労働の、すなわち労働者が自然および自己自身にたいする外的関係の、所産であり、結果であり、必然的帰結である。こうして私的所有は、外化された労働の概念から、すなわち外化された人間、疎外された労働、疎外された生活、疎外された人間の概念から、分析によって生じる。」²⁹⁾

「疎外された労働」カテゴリーは「私的所有」カテゴリーを引き出している。「私的所有は、外化された労働の物質的な、要約された表現として、……労働者が労働と彼の労働の生産物と非労働者とにたいする関係と、そして非労働者が労働者およびその労働の生産物にたいする関係とを包含する。」³⁰⁾

28) 前掲訳書, 110頁

29) 前掲訳書, 113頁

30) 前掲訳書, 117頁

「経済学」は「私的所有」について、人間の外にある事物を論じる。マルクスはそれを「労働」にかかわらせている。

しかしながら「私的所有」についてこのような根底的規定を与えておりながら、マルクスはこれを徹底させていない。私たちは、労働者と非労働者の対置、そして非労働者は「労働」カテゴリーから除外されていることに注意しなければならない。非労働者の労働は労働者と同様に疎外されているのか。それとも疎外されていないのか。マルクスはこの間を徹底させてはいないが、次のように述べている。非労働者は疎外された労働の状態を受容し、解釈の対象としている。³¹⁾

この点は「経済学批判体系」を理解するためには重要である。非労働者、つまり資本家は労働者と同じように私的所有によって支えられている経済を担っている。彼らが「疎外された労働」にたいしてどのような関係にあるのかは当然、確認しておかなければならない。しかし、この間にたいするマルクスの答がないのは十分に予想される場所である。というのは「疎外された労働」カテゴリーは彼の『価値観』からの人間の本源的活動との対照で得られたものであり、その論拠は与えられていない、したがって彼の「国民経済学」批判における「疎外された労働」カテゴリーは外在的であって、これが労働者の労働にだけ「疎外された労働」を適用させることになり、労働者の観点からの国民経済学批判を容易にしている。この適用

31) 「労働者にあっては外化の、疎外の、活動として現れるすべてのことが、非一労働者にあっては外化の、疎外の状態として現れるということである。第二に、生産における、生産物にたいする、労働者の現実的、実践的な態度(心的状態として)は、彼に対立している非一労働者にあっては理論的な態度として現れるということである。第三に、非一労働者は、労働者が自己自身にさからっておこなうところのいっさいを労働者にさからっておこなう。しかし非一労働者は労働者にさからっておこなうところのことを、自分自身にさからってはおこなわない。」(前掲訳書、117-118頁)労働者にとって「疎外された労働」は非労働者には状態であり、解釈対象である。したがって非労働者は解釈者である。労働者は労働疎外を余儀なくされるが、非労働者は疎外された労働を享受する。

は彼の『価値観』によるものであり、恣意的である。

非労働者の生活活動が疎外されているとしたら、マルクスの論理にどのような問題を生じさせるであろうか。労働者と同じように、彼らもまた疎外の状況を克服するために人にとっての本源的活動を必然的に惹起させるという可能性をもっていることになる。いうまでもなく、これはこの段階でマルクスが想定していた実践的展望とは違ったものを生み出す。

マルクスによると非労働者は労働者とは違って私的所有の経済を肯定し、享受している。³²⁾

しかしながら、労働者も非労働者もともに量的世界（価値実践の世界）の人であるから、彼ら是对立関係にあるというだけでなく、感覚、性格、あるいは思考、態度、等々を共通にしているはずである。

人間の本源的活動を使用価値実践、疎外された労働を価値実践とするならば、主体において拮抗している実践の二面性によって措定された量的世界は非労働者と労働者の関係をマルクスのように対立的な面だけを強調することは論理的に問題ありとする。階級関係は市場経済を成立させている共通基盤の上に成立しているのである。

先の問に答えるなら、労働者も非労働者（資本家）も実践の二面性を拮抗させている。

人間の本源的活動→疎外された労働→私的所有（外にあるモノの領有としてでなく、主体的にとらえた、対自的に存在する活動としての私的所有、換言すると価値実践と価値実践の表現体との関係）への展開は実践の二面性から量的世界を措定する論理に変換する。³³⁾

32) 「もし労働の生産物が労働者に属さず、彼にたいするある疎遠な力であるなら、このことはただ、その生産物が労働者以外の他の人間に属するということによってのみ可能である。もし労働者の活動が彼に苦悩であるなら、他の者にとってはそれは享樂であり、他の者の生の喜びであるにちがいない。」前掲訳書、111頁

33) 拙著、前掲書「6章、基本関係の設定」

六、疎外された労働と量的世界（価値実践の世界）

マルクスの「疎外された労働」の視点は疎外された労働が抽象的労働、つまり価値実践として、本源的活動が具体的有用労働、つまり使用価値実践として『資本論』では「労働の二面性」に結実している。

重要なことは、経済学批判体系の基礎カテゴリーとしての「労働の二面性」は検討可能なものとして与えられているということである。「労働の二面性」の論拠は「富（＝商品）」についての先行する諸論述が抽象的労働と具体的有用労働によって分類されたという点である。

「富」は市場社会の人々が最も関心を寄せているモノである。だから、「富」についての論述が労働の二面性から分類されたということは市場社会の労働が二面の様態で存在していることを示している。

私たちはマルクスの分類が的確であるのかどうかを検討することができる。しかも私たちはマルクス以後の「富」についての論述をマルクスの方法によって確かめることができる。

したがって、マルクスの「労働の二面性」に立脚したブルジョア経済学批判はイデオロギーとして一蹴することはできないのである。

「疎外された労働」による国民経済学批判は、いまや価値実践と使用価値実践を拮抗させている主体の四様の認識方式（図－1）によって内在的に果たされている。「内在的」とは批判者の『価値観』それ自体が被批判者の『価値観』と同じように検討対象となっているということである。換言すると、実践が内包している『価値観』と「富」についての論述、つまり実践を正当化する解釈とは不可分離であることを「実践（労働）の二面性」は明らかにしている。

この点を無視するマルクスの労働価値論の解釈、例えばリカードの延長上に位置づけるがごとき解釈はそのエッセンスを消失させているのである。

資本制経済の担い手は価値実践と使用価値実践を拮抗させている主体である。価値増殖の人格的表現としての資本家は価値実践者であって、使用価値実践を潜在化させている。彼の世界は X (価値、つまり量の世界) である。労働者は価値実践者として X での生活態度を身につけているが、使用価値実践者としてこの世界の批判者でもある。労働者はアイデンティを量 (抽象) の世界で感得するが、それとは質的に異なる世界においても感得しようとする。マルクスは次のように述べる。「価値形成過程を労働過程と比較して見るならば、後者は使用価値を生産する有用労働である。運動はここで質的に考察される。その特別な仕方において、目的および内容にしたがって。同じ労働過程が価値形成過程においては、その量的な側面からのみしめされる。もはや問題となるのは、労働がその作業に要する時間のみであり、あるいは労働力が有用に支出される継続時間のみである。」³⁴⁾

ここで注意しておかなければならないことは、人は時間、空間を別にして労働過程で労働し、価値形成過程で労働しているというのではなく、労働過程での労働がまた価値形成過程での労働でもあるという点である。

人は内的に使用価値実践と価値実践を拮抗させているのである。

能動性、創造性として規定された使用価値実践と賃労働 (価値実践) はメダルの裏表の関係にある。賃労働は「それ自身労働の特定の内容、その特別な有用性あるいは、それが表される独特の使用価値とは全然関係をもっていない」から、賃労働によって表される労働主体の行動形態は量によって解釈することができるのである。現実の労働が量としてのみ評価されるようになればなるほど、人間は創造的労働、具体的有用労働への欲求を強める。これが量的世界の批判的評価づけに到る。

労働価値論は量的世界を規定するためだけのものではなく、量的世界を根拠づけ、意義づけもする。剰余価値率は量的世界のなかで、量的世界を所与として規定されているのにたいし、「搾取」は量的世界を意義づけるカ

34) 『資本論』 I, 254頁

テゴリーである。

したがって、私たちは労働者が量的世界を日々、形成しているという視点を欠落させてしまうマルクスの剰余価値率≡搾取率としている展開を受け入れない。また、これから引き出される「階級」の規定も受け入れることはできない。というのは、マルクスの階級規定は歴史的事実としての所有形態だけによって規定されているから、階級構造を固定してしまう。

マルクスの労働価値論はみてきたように価値実践と使用価値実践を拮抗させている主体によって展開されている。

主体の価値化が強まれば強まるほど（価値化された実践対象領域の拡大でもある）資本主義社会は深化・拡大している。

私は主体の外側にあるモノの領有の仕方の変化は主体の実践、実践対象との価値関係のなかで確定されなければならないと考えている。この視点から、資本主義社会の変質は解きあかさされなければならない。

マルクス労働価値論の核心はこの点にある。³⁵⁾

私が「搾取」という用語を使用するとしたら、それは主体の価値化のことであり、搾取度の増大は価値化の深化のことである。「搾取」は量的のみならず質的に規定されなければならない。

主体における価値化の深化は価値実践の場である職場において推進されているのであるが、その確証はアイデンティティを感得する生活の場において得られるであろう。さて、マルクスの「搾取」カテゴリーを検討してきたのであるが、これは社会科学の性格を問うことになるであろう。

補 論

置塩は労働価値説について次のように述べている。{「労働価値説の主要命題と現代の問題」所収『労働価値説の現代的意義』（経済理論学会年報第27集）青木書店}「労働価値説とは、資本制経済における経済諸現象を資本制における労働の特

35) 「労働過程と価値増殖過程」27巻5・6号『山口経済学雑誌』

殊な在り方から解明しようとする学説である。このような立場から労働価値説を見ると、労働価値説は次のような諸命題から構成されていると考えられる。

(1) 人間存続の基本的条件は生産活動=労働である。経済諸現象の分析に当たって、誰がどのように労働し、その成果を誰がどのように処分するかという観点を基底に据える事を要請する。……(2) 人間の労働が、どのような生産力・生産関係のもとでおこなわれるかによって、社会の構成員のうち、誰が生産に関する決定を握り、誰がその決定にしたがって労働せざるをえないかが異なり、労働の結果である生産物のとる社会形態も異なる。……(3) 社会的分業が支配的であり、生産手段が私的・分散的に所有されている社会では、生産物は商品形態をとる。諸商品が互いに交換関係を持ちうるには、すべての商品と直接交換可能性を持つ貨幣が不可欠であり、諸商品は貨幣で測った価格をもつ。……」置塩は労働価値論が(1)(2)(3)の命題から演繹されていると言っているのではない。また、(1)(2)(3)の命題が労働価値論においてどのように体系的に関連しているのかということの説明しているのでもない。

労働の価値規定を(4)として次のように与えている。「……(4) 商品の生産に投下され、商品に対象化された社会的に標準的な抽象的人間労働をその商品の価値と呼ぶ。商品を生産する労働は、社会的性格をもっているにもかかわらず、私的、分散的決定にもとづく私的労働である。……(5) 商品生産が支配的であり、生産手段が社会構成員の一部少数者によって独占的に私有されている社会では、生産手段の所有から排除された人々は賃金労働者とならざるをえない。労働力を購入した資本家は利潤追求を基準とする私的決定のもとで、労働者に労働させる。……(6) すべての部門において、資本家が利潤を手に入れるためには、資本家による賃金労働者の搾取、剰余労働の「強制」が必要である。……」(5)(6) 命題は労働価値論、(1)(2)(3) 命題から演繹されたものではないし、(5)における労働者と資本家は全く外在的に論理の内に取り込まれているのである。労働者と資本家は労働価値論によってその存在を説明されているということになっていない。したがって、(6)での「搾取」用語を引き出している「強制」も労働価値論にとっては外在的に与えられているにすぎない。すなわち、それは労働価値論によって説明されているわけではない。

「……(7) 各部門で搾取された剰余価値は、その部門の資本家の手に入るとは限らない。諸商品の交換が不等価交換である場合には、不等価交換の方向いかんで、剰余価値は他の部門の資本家に流れたり、他の部門から流れ込んだりする。……(8) 諸商品の価格は、市場におけるそのときどきの需給関係によって決まる。私的資本家はこの価格状態に反応して、彼らの私的決定を改訂する。この往復作用によって、社会的生産編成はあるいは均衡の方向に、あるときには不均衡累積的に変動する。後者の場合には、これを均衡化させるには景気循環が必要となる。……(9) 諸商品の価格は種々の理由で変動するけれども、諸商品の間の相対価格(価格比)は常にある許容範囲の中にある。この許容範囲は、諸商品の価値に依存し、またその範囲の広さは搾取率が高いほ

ど大となる。……(10) 諸商品の間の交換が等価交換であるか、不等価交換であるかを統計的に知ることができる。それによって、剰余価値が誰に流れたか、また各部門での労働が市場でどのような評価を受けているかを知ることができる。」

(7) (8) (9) (10) は資本主義経済のメカニズム分析である。ここでは労働価値論はシュムペーターのいう分析用具の役割を果たしている。これこそが置塩の労働価値論の積極的論点である。置塩の分析用具としての労働価値論の解釈は明解であり、教えられるところ大である。私の批判はこの解釈が柴田や森嶋と同じ次元にあるという点である。つまりこの解釈はマルクス理論のエッセンスを欠落させている。資本主義経済を特徴づける(1) (2) (3) は置塩にあってはいかに確証されているのだろうか。

置塩は(1) から(10) までの命題によって労働価値論は構成されているというのであるが、これらの命題の統一的構成を全く説明していない。置塩がマルクスを解釈しているのであれば(私はそのように理解しているのであるが)、各命題の統一的構成をあたえなければならない。マルクスの論理(上向の叙述)はブルジョア経済学の諸カテゴリーの批判であるのだから、労働価値論を構成している叙述の「つながり」を説明することはマルクスの論理を解釈するためには必須のことである。マルクスは実践と解釈、実践と解釈対象とが一体化していることを強調している。「一体化」の認識を欠いているブルジョア経済学者の論理(解釈)は諸カテゴリーの順序づけが恣意的であるというのが、マルクスのブルジョア経済学批判の主要点である。諸カテゴリーの順序(形成)は社会と人間にとっての実践の重要度によって与えられている。したがって解釈者が諸カテゴリーを自由に構成できるというものではない。置塩のマルクス労働価値論解釈はその根本において問題を残しているのである。